

東奥日報

2020年(令和2年)6月25日(木曜日) (12)



フェイスシールド 感染予防に活用を

八戸

八工大生製作 市民病院に50個寄贈

新型コロナウイルスと闘う医療現場を支援しようと、八戸工業大学の学生らが3Dプリンターなどを使って感染防止用のフェイスシールドを50個製作し、22日、八戸市立市民病院へ寄贈した。同大は今後も製作を続け、7月中にさらに250個を同病院へ寄贈予定。

フェイスシールドは同大の学生サークル「メカトロニクス研究会」に所属する学生7人が、機械工学科と

【写真右】八工大生らが製作したフェイスシールドを装着し、着け心地を確かめる今院長

【同左】今院長(左端)にフェイスシールドを贈った石川さん(右端)ら八工大関係者

工作技術センターの教員とともに5月末から製作を開始。3Dプリンターで樹脂製フレームを作り、表面の突起や角張りをやすりで削り取る作業を進めた。顔を覆う部分には、熱で圧着した透明ラミネートフィルムを使用している。

贈式には、同大の浅川拓克・機械工学科准教授と日影学・工作技術センター工師、学生3人が出席。機械工学科4年の石川瑞規さん(22)が、今明秀院長にフェイスシールドが入った箱を手渡した。石川さんは「作業中に指を切ることもあったが、医療従事者の皆さん

の苦労に比べたら大したことはない。感染予防に役立ててほしい」と話した。早速フェイスシールドを試着し、軽い着け心地とクリアな視界を感服した今院長は「当院に対する学生の皆さんの応援が物や形で伝わり、うれしい」と感謝した。

(千葉真由美)